

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00928

研究課題名（和文）欧州・北東アジア境界変動地域での住民間葛藤と相互作用に関わる社会的力学の解明

研究課題名（英文）Social Dynamics of Interaction and Struggle among Residents Affected by Border Change: Case Studies from Europe and North-Eastern Asia

研究代表者

山口 博史（YAMAGUCHI, Hiroshi）

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授

研究者番号：70572270

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は国境ないしは強固な行政的境界の変動という社会的な大変化が、その影響を受けた地域住民間の葛藤や相互作用の面、またそれを取り巻く社会構造に及ぼしたかについて検討するものであった。この研究を実施し、この研究枠組みの理論面での明確化（近縁概念再考も含む）のほか、影響を受けた人びとの生活に関する手記や語りの集積、典型的な地域での量的調査によるデータ収集などの成果があがった。これらの成果に関して、順次学術書籍や雑誌論文、関係学会での報告等を行なっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究により、国境ないしは強固な行政的境界の変動が人びとの暮らしに及ぼす影響を与えるのか、その一端を明らかにする道すじを付けた。こうした境界の変動はつねに世界各地で生じている現象でもあり、その影響を現地社会調査を通じて解明、評価することは広範な学術分野にとっての基礎的資料を提供することにつながる。また量的調査の分析と語りを合わせて理解することにより、何気ない語りを持つ深い意味を明確化することにつながる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how major social changes involving fluctuations in borders or strong administrative boundaries affect conflicts and interactions among residents in affected regions and the surrounding social structure. The results of this research included clarification of theoretical concepts of the research framework (including a rethinking of closely related concepts), accumulation of memoirs and narratives about the lives of those who are affected, and the collection of data through quantitative surveys in a typical region. These results have been released in academic books, journal articles, and reports at related academic conferences.

研究分野：社会学

キーワード：境界変動

1. 研究開始当初の背景

この共同研究の着想源のひとつとなった南スロヴァキアのハンガリー系マイノリティ居住地域について述べる。つとに知られているように、中央ヨーロッパは 20 世紀以降何度も国境変動を経験した。住民は移住しないままに越境を経験するものが少なくなかった。

ヨーロッパ、アジアに視野を広げてみれば、こうした経験(国境や強固な行政的境界の変動)をしている地域は少なくない。この研究ではこうした地域の中から冒頭でも挙げたスロヴァキア、ベルギー、サハリン、ドイツ、韓国および日本を対象とした。これらの地域で生じた 20 世紀以降の境界変動(表 1 参照)は帝国崩壊や体制転換、民族的なコンフリクトによる。またこれらの地域は多民族混住地域を域内にもつケースがある。これら多民族混住状況を念頭に置きつつ、現地でのフィールドワークを行なって、境界変動が住民の暮らしに与えているインパクトを詳細に把握することはきわめて学術的意義の高い活動であることが予想された。また研究開始の直前にはカタルーニャ(スペイン)の独立運動が大きく報道されており、今後の研究のすそ野は広いことが想定された。

表 1 本研究であつかう境界変動 略年表

1905	ポーツマス条約により南樺太がロシアから日本に割譲。
1910	日本による韓国併合。
1918	チェコスロヴァキア独立(オーストリア・ハンガリー二重帝国から)、ドイツ帝国崩壊・ヴァイマル共和制成立。
1939	ナチス・ドイツによりチェコスロヴァキア解体。スロヴァキア南部はハンガリーに割譲。
1945	チェコスロヴァキア再独立、スロヴァキア南部を再統合。日本敗戦、朝鮮総督府降伏。樺太庁が事実上の廃止。
1949	東西ドイツ分立。
1950	朝鮮戦争(-1953)の勃発。
1970	ベルギーで民族別の連邦化開始。
1990	ドイツ(再)統一。
1993	チェコとスロヴァキアの分離(ピロード離婚)。ベルギー分割・連邦化(蘭語系と仏語系政府が分離)。

(今回の科研費申請書より再掲)

2. 研究の目的

この研究における大きな目標は、境界変動という基層的な社会構造変化が、その影響を受けた地域の住民の暮らしにいかなる影響をおよぼしたかというものであった。暮らしという言葉は、その内容を例示すれば職業生活、市民活動、友人関係、家族・親族関係、意識など多様なものを含む。多民族混住地域であれば教育や言語のありかた、メディアなどさまざまな要素が視野に入る。これら諸点に関して、境界変動が中長期的にいかなる影響をおよぼしたのかを問うていくのが研究目的の大要であった。

対象地域は、上記のとおり北東アジア、ヨーロッパ地域(特に、日本と韓国、サハリン、ドイツ、スロヴァキア、ベルギーなど)を主とした。各地域に関しては次のような研究方針で臨んだ。

- ・日本の植民地体制が崩壊した後、在日コリアンらには日本語教師として韓国にわたるケースがあった。これら日本語教師在日コリアンは、境界変動という基層的構造変動状況のもと、日本語ネイティブ話者という各自が帯びた特徴とどのように向き合うことになったか。
- ・サハリンでは日本の植民地体制の崩壊とともに境界変動が生じた。境界変動後サハリンに残留した旧住民(アジア系)がいる。これらの住民と新しい支配層となったソ連系住民との関係づくりの実情はどのようなであったか。
- ・よく知られているように 1990 年の東西ドイツ(再)統一があった。そこからかなりの年月を経て、西ドイツに吸収された東ドイツの人びと(特にイデオロギー面で影響の大きかった社会科学系研究者)の経験した葛藤はいかなるものであったか。特に職業や市民生活の面から問う。
- ・スロヴァキアでは幾度かの境界変動(およびこの国の場合は体制転換もそこに重なる)を経て、国内南部に居住するハンガリー系住民(国内では少数派)はスロヴァキア系住民(国内では多数派)とどのような関係を築いているか。また国境移動が暮らしに与えたインパクトは住民の社会層ごとにどう異なるか。
- ・ベルギーでは遠心的連邦化とともにオランダ語、フランス語圏間の強固な境界形成がなされた。この言語境界線付近の地域住民(オランダ語、フランス語話者が混住)はいかに両言語話者間の葛藤を経験しているか。また隣人として相互作用を行なっているか。またそれらの人びとは、住民側から境界や地域社会の性格にいかなる変化をもたらしているか。

3. 研究の方法

この研究にあたっては、現地での聞き取り調査、観察調査、文書資料調査のほか、特に南スロヴァキアにおいて量的調査を行なった。またスロヴァキアおよびドイツに関しては、研究者相互

にフィールドを訪問し合い、各フィールドについて忌憚ない意見交換をすることができた。

聞き取りについては、現地のキーパーソンを中心に、現地の状況を確認しながら聞き取りの細部にわたる詳細な解釈を可能とするよう、ていねいに実施している。特にライフヒストリーに関する聞き取り研究については、聞き取りの社会的背景に関する情報を明確化するため現地の文書館等での資料収集にも取り組んだ。資料収集についてはこうした性格のものだけではなく、現地の状況や住民の生活に関わる文書資料を問口広く収集し、研究の糧とするようにした。

観察調査に関しては、フィールドノーツを細かく作成していくことその他、研究を進めていくうえで重要な写真なども撮影、収集することにつとめた。図1はそうした写真のひとつである。現在のスロヴァキアとハンガリーの国境を成すのはドナウ川である。ドナウ川ほとりの町のコマルノは写真にあるようにスロヴァキア語とハンガリー語のふたつの名前を持つ。ハンガリー語の名はドナウ川対岸のコマーロムと同一であり、いまでは境界変動によりスロヴァキアとハンガリーに分かれている二つの町が、かつてひとつの町であったことを物語るものとなっている。これは一例であるが、こうした状況にある各地のフィールドを実際に歩きながら研究を進めていった。

南スロヴァキアでの量的調査にあたっては、メンバーで議論しながら調査票を作成し、スロヴァキア現地の専門家等の助言・協力も得ながら2021年度に実査を行なうことができた。ヨーロッパでは日本で行なわれているようなランダムサンプリングが容易でないことが研究活動中に判明したため、現地専門家らの意見を求めつつ、クォータ・サンプリングによってデータ収集を行なった。得られたデータは510ケースであった。

4. 研究成果

韓国と日本に関しては次のようである。(1)在韓在日コリアンの国境を越えての移動と言語を中心とした教育の選択、在韓在日コリアンを取り巻く近年の状況に関して当事者、および、関係者の方から聴き取りを行った(こちらについてはデータの収集・整理をいったん終えたが、分析・調査を今後の研究につなげるため粘り強く行なっている)。(2)朝鮮学校の元理事に移動の経験などに関する聴き取りを授業の一環としても行った。国境変動によりもたらされた経験の共有により「移動する/せざるをえない人々」に対する重層的な理解と複言語主義な視点の獲得、今後の多文化共生のあり方などへの考察の深まりが見られた(「地域でのフィールドワークおよび日本語支援から大学生は何を学ぶか：横浜市鶴見区での活動をもとに」『国際理解教育』日本国際理解教育学会編28:23-31、2002)。

サハリンに関する研究成果は次のようである。樺太引揚者が書きためた手記の翻刻・編集作業を行ない『樺太覚書』として刊行した。たんなる体験の記述ではなく、引揚者の立場から複雑な歴史を持つ樺太という土地の歴史的意義や引揚者の言動を検討するという貴重な内容であり、境界変動地域を生きた個人の自己内省の分析を行ない、引揚者コミュニティにおける歴史認識のありようなどを明らかにし、その成果を「境界地域を問い続ける引揚者：工藤信彦『樺太覚書』とサハリン島近現代史」(民衆史研究会シンポジウム)として口頭発表した。また、境界変動地域における「残留」現象の比較研究も行ない、同様の現象であっても国際関係や人口規模、国民意識などにより社会的な受け止め方が異なるという「構築性」を明らかにし、論文として「日清戦争と日露戦争における「残留」の比較史研究：台湾島とサハリン島における境界地域史」(『釧路公立大学紀要人文・自然科学研究』第35号、巫観との共著)、口頭発表として「境界変動と「残留」：地域と時代を越えて」(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのセミナー)を発表した。

ドイツに関しては次のようである。ベルリン・フンボルト大学社会科学者のライフヒストリーから、境界変動に付随して生じた「大学改革」後の転機をエイジェンシー観点より分析し、その成果を学会発表するとともに論文にまとめた。また、ポスト・コロナ禍における現地調査の再開をにらみ、2023年1月には、およそ3年ぶりにドイツ・ベルリンを訪れ、コロナ禍の社会生活や困難に関する聞き取りを行い、今後の円滑な調査活動に必要な知識をアップデートした。

ベルギーに関しては次のようである。コロナ禍の直撃を受け、また2022年度に関しては担当者自身の体調不良(現在は復帰)も重なったが、コロナ禍直撃前の現地でのライフヒストリー聞き取りの試みを行ないつつ、これまで蓄積したデータ解釈のための多くの文書資料を得た。またそれらの資料に支えられたベルギーの事例研究を理論的に昇華させた論文を発表し、境界変動が生活・暮らしの多くの側面に影響する状況に関する研究領域の提案を行なった。

スロヴァキアに関しては次のようである。上記「3.研究の方法」でも記したとおり、南スロヴ



図1 コマルノ(2019年撮影)

アキアのコマルノで量的調査を実施した。この量的調査実施に先立ち、同地域の社会経済政治的、人口的特徴を明確化するため、因子生態分析を導入して、調査対象地域の特徴を計量的にとらえること、また国内他地域との対比を行ない、調査対象地域の最終的確定とデータ分析の際の解釈の補助線を引くための作業を行なった。調査票の作成を重点的に行なったのは人類学と社会学という(隣接分野ではあるものの)学問的バックグラウンドも、調査経験も異なる研究者であった。議論にはじゅうぶんな時間をとることができ、またスカイプなど通話アプリケーションや現地専門家の意見・助言などの支えもあり、非常に高い水準の調査票をスロヴァキア語とハンガリー語で作成できた。この経験は当初明確に意図したものではなかったが、今後の研究生生活の糧となるとともに、人類学と社会学における調査方法論上の進展をもたらす知見にもつながっていくものと思われる。またこのデータを用いた研究成果論文はスロヴァキア現地の学術誌に掲載された。またスロヴァキアの研究にもとづいた研究報告を多くの日本社会学会をはじめとした学会、研究会で行なった。これらに加えて現地でのフィールドワークもコロナ禍前、また2022年度には積極的に実施し、量的データ解釈や新たな問題発見のための質的データ収集、また量的データから示唆される地域の空間的特徴の把握などきわめて実りの多い研究活動となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 飯島幸子	4. 巻 44
2. 論文標題 ドイツ統一後の「大学改革」と中間教職員が直面した困難：ベルリン・フンボルト大学における事例研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文明21	6. 最初と最後の頁 135-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中山大将	4. 巻 10
2. 論文標題 日ソ戦後の在南サハリン中華民国人の帰国：境界変動による樺太華僑の不本意な移動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 境界研究	6. 最初と最後の頁 45-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/jbr.10.45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山口博史	4. 巻 91
2. 論文標題 スロヴァキアの社会・経済的指標に基づいた地域特性分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都留文科大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 210-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34356/00000512	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 KAMBARA-YAMANE, Yuko	4. 巻 -
2. 論文標題 Describing feelings between frustration and hope: Potential of anthropological minority research in southern Slovakia	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Central European Connections in National Minorities' Development at the Beginning of 21. Century	6. 最初と最後の頁 123-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神原ゆうこ	4. 巻 47
2. 論文標題 (特集論文) マイノリティであることと民主主義的価値観の親和性と矛盾：スロヴァキアのハンガリー系 にとっての1989年以後	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ロシア・東欧研究	6. 最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中山大将、竹野学、木村由美、ブル ジョナサン、パイチャゼ スヴェトラナ	4. 巻 11
2. 論文標題 サハリン樺太史研究会第41回例会 樺太の 戦後 史研究の到達点と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道・東北史研究	6. 最初と最後の頁 108-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山口博史	4. 巻 34
2. 論文標題 境界変動地域の社会学に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域社会学会年報	6. 最初と最後の頁 135-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山大将・WU Liang	4. 巻 35
2. 論文標題 日清戦争と日露戦争における 残留 の比較史研究：台湾島とサハリン島における境界地域史	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 釧路公立大学紀要人文・自然科学研究	6. 最初と最後の頁 17-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山大将	4. 巻 31
2. 論文標題 境界地域サハリン・樺太の歴史から考えるウクライナと北海道の未来	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 釧路公立大学地域研究	6. 最初と最後の頁 69-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中里奈	4. 巻 28
2. 論文標題 地域でのフィールドワークおよび日本語支援から大学生は何を学ぶか：横浜市鶴見区での活動をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際理解教育	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯島幸子	4. 巻 49
2. 論文標題 エイジェンシー観点に基づいた『大学改革』後の転機に関するライフヒストリー分析：「ドイツ統一」とベルリン・フンボルト大学社会科学者の事例研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文明21	6. 最初と最後の頁 55-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko KAMBARA・Hiroshi YAMAGUCHI	4. 巻 17(2022/2)
2. 論文標題 Higher Education and Ethnic Minority in an Ethnically Diverse Town: Survey Results on Education, Personal Network and Mobility in Komarno	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Eruditio - Educatio	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 飯島幸子
2. 発表標題 旧東ドイツ社会科学者の「統一」に関するライフヒストリー分析：対象者の語りに表れる特有な社会的文脈の読み取り
3. 学会等名 第12回東海社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯島幸子
2. 発表標題 ドイツ統一と「大学改革」：ベルリン・フンボルト大学社会科学者が経験した困難に関するライフヒストリー分析
3. 学会等名 第92回日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神原ゆうこ・山口博史
2. 発表標題 民族混住地住民にとってのエスニック政治とその日常：国境の町コマルノにおけるハンガリー系とスロヴァキア系の民族間関係
3. 学会等名 第30回 移民の参加と排除に関する日仏研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山口博史・神原ゆうこ
2. 発表標題 境界変動がもたらすインパクトを考える：ベルギーとスロヴァキアの比較から
3. 学会等名 第79回ベルギー研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKAYAMA, Taisho
2. 発表標題 Border Shifting and People in Russo-Japanese Borderlands: Sakhalin/Karafuto and Kuril/Chishima
3. 学会等名 Competing Imperialisms in Northeast Asia: Concepts and Approaches, Opening Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中山大将
2. 発表標題 住民から見た日本領樺太の形成と解体
3. 学会等名 国際フォーラム「2・8独立宣言100周年、日韓未来100年と南北協力のための政策提案フォーラム：日韓歴史葛藤の原点、植民地支配責任に対する考察」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAMBARA, Yuko
2. 発表標題 Solidarities based on uncertain membership: Voluntary activists and the politically unconcerned in the Slovak-Hungarian heterogeneous ar
3. 学会等名 Inter Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神原ゆうこ
2. 発表標題 スロヴァキアの多文化地域における政治的文脈と文化人類学的調査の可能性：ハンガリー系マイノリティ居住地域のフィールドワークより
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会シンポジウム「中・東欧におけるフィールドワークからノを考える」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神原ゆうこ
2. 発表標題 マイノリティであることと民主主義的価値観の親和性と矛盾：スロヴァキアのハンガリー系にとっての1989年以後
3. 学会等名 ロシア・東欧学会研究大会（共通論題「ロシア・東欧における国のかたちとネーションのゆくえ」報告者として）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuko KAMBARA
2. 発表標題 Describing feelings between frustration and hope: Potential of anthropological minority research in Southern Slovakia
3. 学会等名 Medzinarodna vedecka konferencia: Stredoeuropske su vislosti narodnostneho vyvoja na zaciatku 21. storocia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山大将
2. 発表標題 戦後サハリンにおける旧樺太住民慰霊碑等の建立史研究
3. 学会等名 日本移民学会第28回年次大会自由論題報告
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口博史・神原ゆうこ
2. 発表標題 なじみのある外国に通勤するということ：スロヴァキア南部からハンガリーへの越境通勤とその規定要因に関する分析
3. 学会等名 第15回東海社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山大将
2. 発表標題 日ソ戦後の記憶とジェンダー：サハリンをめぐる残留と抑留
3. 学会等名 人文研アカデミー2022シンポジウム「東アジアの脱植民地化とジェンダー秩序：女性たちの経験と集合的記憶の再構築」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山大将
2. 発表標題 境界地域を問い続ける引揚者：工藤信彦『樺太覚書』とサハリン島近現代史
3. 学会等名 2022年度民衆史研究会シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中山大将
2. 発表標題 境界変動と 残留 ：地域と時代を越えて
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター公募研究プロジェクト型セミナー「残留の比較史研究：シベリアから台湾・東南アジアまで」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 飯島幸子
2. 発表標題 「ドイツ統一」に関するライフヒストリーにおけるエイジェンシーの発露：ベルリン・フンボルト大学社会科学者の転機の事例分析
3. 学会等名 第15回東海社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口博史・神原ゆうこ
2. 発表標題 スロヴァキア系とハンガリー系の民族間結婚がもたらすもの：南部スロヴァキア地域調査からの示唆
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口博史・神原ゆうこ
2. 発表標題 民族混住地域における言語選好：スロヴァキア南部の地方都市を事例として
3. 学会等名 第92回多言語社会研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 中山大将	4. 発行年 2019年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 120
3. 書名 歴史総合パートナーズ10 国境は誰のためにある？ 境界地域サハリン・樺太	

1. 著者名 中山大将	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国際書院	5. 総ページ数 389
3. 書名 サハリン残留日本人と戦後日本：樺太住民の境界地域史	

1. 著者名 工藤信彦著、中山大将編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット (UBRJ)	5. 総ページ数 400
3. 書名 樺太覚書	

1. 著者名 中山大将	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 512
3. 書名 日ソ戦争史研究会編『日ソ戦争史の研究』（「日ソ戦後のサハリン残留日本人問題：ソ連地域未帰還者問題の中の樺太旧住民」、440-462ページ）	

1. 著者名 中山大将	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国際書院	5. 総ページ数 341
3. 書名 王柳蘭、山田孝子編『ミクロヒストリーから読む越境の動態』（「樺太日本人慰霊碑はなぜ建立できたのか：日ソ戦後サハリンにおける樺太旧住民慰霊碑等建立のミクロヒストリー」、231-262ページ）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中山 大将 (NAKAYAMA Taisho) (00582834)	釧路公立大学・経済学部・准教授 (20102)	
研究分担者	飯島 幸子 (IIJIMA Sachiko) (00759623)	愛知大学・国際コミュニケーション学部・准教授 (33901)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 里奈 (TANAKA Rina) (40532031)	フェリス女学院大学・文学部・教授 (32711)	
研究分担者	神原 ゆうこ (KAMBARA Yuko) (50611068)	北九州市立大学・基盤教育センター・教授 (27101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関